発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2−4−1
丸ノ内ビルデング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（212）4007・1447
編集責任者　中嶋　博
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1983年12月25日発行
第15巻　第12号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 15　No. 12号

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

自由時間の活用と生涯教育

—スウェーデンに学ぶ—

Active Use of the Free Time and Life-Long Education

—Some Suggestions from Sweden—

常務理事　早稲田大学教授　中　嶋　博
Prof. Hiroshi Nakajima

よく＜余暇時代＞がやってきたといわれ、レジャーライフの計画が大切であるとされ、関連産業も盛況である。また、国民のニーズも物的欲求の充足から質的欲求への充足、精神的欲求の充足へとその重点が次第に移行してきている。

その何よりの証拠に、経済企画庁国民生活局編の〝国民の生活ニーズとその意識構造〟（第4回国民生活選好度調査、昭和58年5月）によれば、＜生活の中で今後充実させたいもの＞（2つをあげよ）の項では、貯蓄40.2%の次が教養・娯楽28.3%、第三に実に教育24.5%が顔を出してきているのである。

この点からすれば、従来の国民生活時間調査（たとえばNHK放送世論調査所の）が、生活行動を、①生活必要時間、②労働時間、③自由時間と大別しているが、③には趣味・娯楽の項はあっても、教育や学習の項がないのは不都合といわなくてはならない。

ところで筆者はかねてから、余暇と自由時間は一致しないもの（自由時間は極めて積極的および生産的な面をも備えており）と考えていたが、最近OECDの社会指標開発プログラム報告書（1982年）で、オース博士（Dr. Dagffin Ås）による「時間利用の測定について」の論文にふれて、大いに意を強うした。

博士は自由時間は余暇と混同されてはならないことをまず強調し、自由時間は次の8つの範疇があるとする。①スポーツと戸外活動、②教育と学習、③団体諸活動、④娯楽と文化、⑤社交と訪問、⑥趣味と創作的活動、⑦マスメディア、⑧くつろぎ。

また博士が、積極的な自由時間、また活用ということに関し、①スポーツなどの積極的行為と活動、②創造的芸術的活動および自己表現、③文化的教育的活動への参加、④団体活動および市民的責任の受容の4つをあげているが、実はこれこそ福祉社会スウェーデンの生涯教育活動そのものである。

OECD教育調査団が、1981年の報告書でスウェーデンの教育に関し、驚歎しているのは、約29万の学習サークルに約270万人の成人が参加していること、地方自治体成人教育の整備、大学への社会人の大幅入学、1975年からの教育休暇法の施行と、翌年からの特別成人奨学手当制度の発足等であり、自由時間を活用しての生涯教育が＜リカレント教育＞の原理で制度化されている点であった。

まさにここには〝だれでも、いつでも、どこでも、ただで学べる〟学習社会が一足先に実現しているのであり、われわれの今後学ぶべき点は余りにも多い。

目　次

自由時間の活用と生涯教育……中嶋　博…1
＜Göteborg 通信＞整理整頓をしなかったために子どもをとりあげられたおかあさんの話……三瓶　恵子…2
（高齢化社会調査視察団報告）つづき
ヨーロッパ白秋……宮城　早苗…3
オスロホテル偶感……下村　好代…3
視察団添乗の記……小宮　健嗣…4
スウェーデン伝統手工芸展開催さる……4
プリンセス・リリアンスウェーデン船を進水……4
昭和58年度研究月報目次一覧……6

＜Göteborg 通信＞

Letter from Göteborg

整理整頓をしなかったために子どもをとりあげられたおかあさんの話

会員 三 瓶 恵 子
Mrs. Keiko Sampei

「昔々のことです。片づけのとても嫌いなおばさんがいました。おばさんの仕事は学校の掃除婦さんでした。おばさんは学校の掃除の仕事はきちんとやったのに、家ではぜんぜん掃除をしないで、子ども達と遊んでばかりいました。社会局のおじさん達が何回注意しても、おばさんの掃除嫌いはなおりませんでした。社会局からお金をもらうと、おばさんは掃除機を買わずに子ども達のおもちゃを買ってしまうので、家の中はますますごちゃごちゃになるばかりでした。ある日とうとう社会局と警察のおじさん達がおばさんの家に行って、三人の子ども達をとりあげてしまいました。みなさんもちゃんと掃除をしないと、こわいおじさんにさらわれてしまうから、気をつけないといけません。おしまい。」

という事件が、昔々ではなく今年、イョンシェーピング Jönköping で実際におこりました。子ども達（現在19歳、11歳、6歳）の強制保護を機に、イョンシェーピング市では、はたして〝社会当局〟にそこまでする権利があるのかどうかということについて大変な論争がなされ、その後10月に入ってからテレビ番組にこのことがとりあげられ、また第二の全国的な論争がなされています。

事の次第は、上の〝物語〟の通りです。ウッラ Ulla という中年の女性（夫なし）が三人の男の子達といっしょに暮らしていたのですが、彼女は家の整理整頓をまったくしませんでした。彼女の言い分によれば、「自分は学校の掃除婦の仕事をしている。帰ってくれば子ども達と自分の食事を作るのが精いっぱいである。余分な時間があれば、子ども達と野山に行っていっしょにすごした。自分にとっては、家の中をきれいにすることよりも、子ども達といっしょにいることの方がずっと大事だ。経済的に困難なので社会福祉局から援助をうけることにした。すると社会局の連中は掃除をしないことに文句をつけ、子ども達をとりあげてしまった。これは自分の信念がふみにじられ、〝社会〟の規範・価値観をおしつけられたことを意味するものである。」ということです。

ウッラは現在は〝普通の家庭以上に〟きれいにみがきあげられた家に、19歳になったので（大人と認められて）家に帰ることを許された長男といっしょに暮らしています。下の二人の男の子達はいまだに里子にだされたままで、彼女とは電話での接触しか許されていません。

テレビでも、巷でも賛否両論が乱れとんでいます。ごく一般的に考えれば、「何も掃除をしなかったくらいで……」という意見が大半でしょうが、テレビや新聞に載った写真を見ると、ウッラの家の〝無秩序〟は確かに異常と思えるほどです。多分に彼女が当時ノイローゼに近い状態にあったのではないかということを想像させます。でも、近所の人々、子ども達等、彼女達のことを知る人々皆、ウッラと子ども達との関係はとてもよかったと述べています。その母子関係を果たして〝当局〟が力づくで裂くことが許されるのかどうか……論争は果てしがありません。問題が〝掃除〟に関するだけのことであるなら、家がきれいになった今、ウッラには下の二人の子ども達をとりもどす権利があるはずです。

ウッラの訴えは、現在、第二審の刑事裁判所 Kammarrätten で審議検討されています。論争している誰もが、「子どもにとっての最良の方法を選ぶべきだ」と主張します。〝子どもにとっての最良の方法〟は、この場合どうすることなのでしょうか。社会、政治、教育について、深く考えさせられる事件です。

高齢化社会調査視察団報告特集 （つづき） 到着順に掲載

ヨーロッパ白秋

向陽スポーツ文化クラブ副会長 宮城早苗

本来この月報への掲載にふさわしい学術的で詳細な報告は学者、研究者の諸兄姉にお任せし、ここでは極めて主観的な、素人の感想を述べさせていただきます。

私は、東京は大森の旧家で、まわりに多くの分家、婚家先を持つ母の実家のそばで生れ、たくさんの老人の生きざまと死を見て育ちました。また自分が老いを自覚し始めたこの数年の間にも父を含め実に７人もの身内の老人の死に出遇い、そのひとりひとりの生きざまと老いと死について考えさせられることが多くありました。

賢く生きる人、自分の力をいつまでも信じたかった人、病いの中にも家族への思いやりを忘れなかった人、家事を早々と息子に譲り自分のやりたいことをした人――。彼らが私の心の裡に残して行ったものをこの視察と撚り合せてみたいという願いが湧いておりました。

そのような目で訪問国をみた時、一番感じたことはその国の人々が国を挙げて高齢化社会にとり組んでいることでした。

私の一族の老人たちは家族という小単位の中で殆んどの日々をすごし、そこに更に広い社会とのかかわりを積極的に見出すことはありませんでした。それに対しこれらの国々では年金生活に入った老人たちがお互いに助け合うのはもとより、子どもの頃からのボランティア活動の実践、若人と老人が一諸のプログラムで勉強する、運動する、リクリェイションを持つ等、公的機関の全面的援助もさることながら、自分たちで活動の輪を拡げて行く努力は見習うべきだと思いました。

日本の場合、何事によらず行政主導型で行なわれるなかで、いかに心をこめてゆくかは重い課題です。自然発生の相互扶助の心やさしさをいかに拡げ受入れる箱作りをするかが本当の行政の仕事だと思えます。

なおできることならばこの訪問で出会った高齢者の方々に「お倖せですか。」「今のお気持は？。」など聞きたかったのですが、語学力がなく、この方々がどのように心の平穏を求めてこれらの場所に寄って来、どのように満足して自分の住み家に戻るのか、整った社会の向の側にある「老いの心」そのものに触れることができなかったのが、ひとつの心残りとなりました。

オスロホテル偶感

向陽スポーツ文化クラブ理事 下村好代

オスロ市は普段着の町である。ホテルの部屋から眺めた街は、黒ずんだ壁と、鉛色の教会の尖塔を抜立たせた不揃いの屋根の連りであった。夜更けまで路面電車の軋みや、ゴミ収集車のモーターの音が響いて、公園に面したストックホルムのしんとしたホテルとはかなり趣を異にしている。ホテルでエレベーターを待っていると、ゴトゴトという昇降の音がかなり遠くから伝わってくる。箱に収まると身体が震動する程だ。急ぐ時は階段の方が早いと真面目に思う。人気のない暗い廊下でアラブ系の大男に不意に出合った時には、飛上る程驚いた。

最初から、部屋のトイレの鍵の工合がおかしかった。バスの排水は足元の床を濡らすし、ツインのベッドの並べ方は直列で、一体頭をどちらに向けて寝るべきか考えるような部屋であった。それが二日目の夜、遂に鍵が壊れてしまったのだ。

いろいろ試みたが結局は別な部屋のトイレを使ってくれということになってしまった。夜更けの廊下の一番はづれ、ボーイがドアの鍵を開けてくれた。恐る恐る覗くと、そこはガランとしたおよそ14・５畳程の広さの部屋で、入口の突当りには診察台のようなベッドが一つ、その左奥の離れた位置に、両脇に手すりの金具が渡されたトイレがあった。トイレと向い合って大型の浴槽がある。つまりこの部屋は車椅子専用のバスルームであった。その夜と翌朝出発までの間、私達はこの気のひける程開放的なトイレを使うことになり、オスロ市のもう一つの面をみた思いだった。

今ではデパートや病院など身障者用のトイレは珍しくはない。しかしホテルの個室ではどういう風になっているのか私は全く知らない。日本で私の友人は、車椅子は部屋の入口に置いて室内は松葉杖を使うという。外国の他のホテルでは一体どうなのか誰か知っている方は教えていただきたいと思う。しかし、オスロのこんな古色蒼然といったホテルで、福祉の厚みに直接触れることが出来たのは大きな収穫だったと思っている。

視察団添乗の記

会員　ユニバーサル航空サービス営業本部長　　小　宮　健　嗣

スウェーデン社会研究所様（以下研究所と言わせて頂きます）ご主催の視察団には過去何回か添乗させて頂きましたが、今回も内容豊富な旅行で終始したと思っております。

スウェーデンはいつもながらインスティテュートの手配が良く行き届き感銘を受けました。その他の国々もこちらの要望通りの準備をしてくれており、改めて研究所に敬意を表する次第でございます。特にノールウェイでは質問状の順序通りの解答を頂き、同国人独特の地味で堅実な気質が窺えました。

また、オランダはフィリップス社のアイントホーヘンにある施設を訪れましたが、時計を作っている工場があり、同社の退職者が頭を衰えさせないための手先の作業を趣味で行っている処など余裕が感じられ、年金等経済的裏付けがあってのことだと羨ましい限りでした。

今回はバス旅行も組込み、ベルギー、オランダ間をバスで走りましたが、税関検査も無くいつの間にかオランダ領に入ったことが判り両国の緊密な間柄が感じられると共に、各国の垣根はいつ取払われるのかと思いました。

その他ストックホルムのGRANNANSVARでの若手有名歌手の飛び入り、オスロホルメンユーレンのジャンプ台見学、パリのリドでのダンス、ワーテルローの226の石段昇り、滅多に訪れられないデルフト、ハーグ、アントワープの町々等印象に残ることばかりでした。短期間の旅行で期間中お二人も誕生日を迎えられたのも珍しいことでした。

団長の三浦先生、副団長大橋先生を始め、皆々様のお蔭で無事旅行が終了出来ました事を改めて感謝申し上げる次第でございます。

高齢化問題は今後共社会の中枢を占めるテーマと思われますので、研究所様にて是非この種企画をお続け下さいますようお願い申上げこの拙文を終らせて頂きます。

≪ニュース≫

スウェーデン伝統手工芸展開催さる

Swedish Handicraft Exhibition in Japan

東京玉川高島屋ショッピングセンターで、11月3日～15日の間、「スウェーデン伝統手工芸展」が開催された。

同展は、技術革新をリードしている同国の反面にある、まさに「手づくり」といえる伝統手工芸と文化を紹介するにふさわしく、5年に1度ストックホルムで開催されるビッグイベント「ヘムスロイド展」の中から、スウェーデン国立手工芸協会が特に選んだ古典織物、現代刺繍、二重織、木工・金工芸品等約400点が展示された。

開会式は常陸宮妃殿下のご臨席を得てテープカットも行われたが、スウェーデン通産大臣も祝辞を述べに本国からみえられ、日瑞文化・貿易交流の点からきわめて意義のある展示会であったといえる。

なお引続き、12月29日～1月10日名古屋丸栄で、1月12日～17日京都高島屋でも開催される。

プリンセス・リリアン　スウェーデン船を進水

Princess Lilian launched a Swedish Shiph

プリンス・ベルティルとともに来日されたプリンセス・リリアンは、11月15日横浜で、スウェーデン、ジョンソンラインのタンカー〝ブー・ヨンソン〟号の進水式を取り行われた。その前日、秩父宮妃殿下はプリンセスのために午饗会を催され、故秩父宮殿下がかってヨーロッパにご留学中に、スウェーデン国王故グスタフ五世陛下とテニスをされたときの珍らしいお写真をご披露になった。　（YO）

燃料用泥炭の採取量を増大させる新装置

此程、スウェーデンの電力局、エネルギー庁、技術開発庁（ＳＴＵ）が共同で、燃料用泥炭採取量の大巾増を約するといわれる新装置を開発した。同装置は、泥炭を細かく砕く急速回転刃を特徴とし、粉砕泥炭は、その後、10㎝長さの細片に圧縮される。

テスト結果は、新法式が、従来法に比べ、泥炭をはやく乾燥させることを示している。新技術利用で結果的に生ずる泥炭片は、亜炭に形状が近似しており、他の技術で採取された泥炭より目が詰んでいるので、輸送や貯蔵が易すいといわれる。

新装置の製造元は南スウェーデンのオースビイにあるシエーランデルス社（AB Sjölanders）。キャタピラー装備の同装置は、水圧式で、およそ50メートル／時のスピードで泥炭地を横断することができる。備え付けの刃（刃渡り1.5メートル、毎分回転数800～1,000）は、それが覆う地面１メートルにつき約１立方メートルの泥炭を激しくかき回し、この過程において、泥炭繊維のおよそ２分の１を、粉砕、裁断する。なお、これにより、泥炭中の水分の蒸発が、従来より早められるという。今日まで、燃料として用いる以前の泥炭の水分除去は、極めてむずかしい問題を呈示していた。

なお、こうして採取された泥炭は、おそらく、採集及び圧縮作業の際に、フエノールとオイルが放出されて結びつくことが原因であろうと思われるが、比較的、湿気をおびにくいという特性がある。採取後、泥炭は一週間程、広げられて乾かされてから――湿度が高かったり、雨だったりすれば、もっと長期に渡ってであるが――倉庫ないし直接ユーザーの手元に輸送される。

スウェーデンの日刊新聞の発行部数、上半期において、やや下降

ティドニングススタティスティーク（Tidningsstatistik＝スウェーデンの発行部数に関する監査を行なう事務局）の発表によると、本年度上半期における我国179の日刊新聞の週日の発行部数は、昨年同期比で0.7%減の468万9,300部であった。

そのうち、一週間７日発行の14の新聞の週日発行部数は、0.6%減の236万6,600部であったが、この減少のほとんど全てが、４紙の夕刊新聞のうちの一紙への読者の移行によるものであった。ただし、14の日刊紙の日曜日の発行部数は、逆に、0.8%増の270万9,400部であった。

同期において、最高の日刊発行部数を記録したのは以下のとおりである。（週日発行部数）

朝刊紙１．ストックホルムのダーゲンス・ニィヘーテル（Dagens Nyheter）38万7,000部　2. イェーテボリのイェーテボリスポステン（Göteborgs-Posten）28万6,000部　3. ストックホルムのスベンスカ　ダーグブラーデット（Svenska Dagbladet）20万9,000部

夕刊紙１．ストックホルムのエクスプレッセン（Expressen）53万1,000部　2. ストックホルムのアフトンブラーデット（Aftonbladet）34万2,000部

なお、全部で41誌ある週刊誌の発行部数（本年度上半期）は、昨年同期比で５%減の298万部であった。

14か国語で出版された移民のための包括的新ガイドブック

此程、スウェーデン移民局が、「スウェーデン―移民のための全般的紹介書」“Sweden—a general introduction for immigrants”と題する246頁のガイドブックを14か国語で出版した。同書は、移民の救済並びに権利義務に特に重きを置いて、スウェーデンの様々な生活様相に関する簡潔な記事を掲載している。

新ガイドは、労働生活、学校、税制、医療、交通、子供、家族といったテーマ別の18章に分けられており、読者に、スウェーデンの日々の生活をつぶさに紹介するとともに、様々な問題が生じた際には、どの地方自治体を利用すべきかといった情報を提供する。

同書は、移民のための参考書として意図されたものであるが、移民のスウェーデン語の教材としても利用でき、とくに教師便覧は、後者の目的に役立つものと思われる。また、移民の出身国語で書かれた版（フィンランド語、英国、ポーランド語、スペイン語、セルボクロアチア語、ギリシア語、トルコ語、アラビア語、ハンガリー語、フランス語、ドイツ語、チグリニア語、中国語の各版）の表題、内容一覧、題目索引には、スウェーデン語の表記が付されている。なお、上述の13の外国語版の他に、もちろんスウェーデン語版が出版されている。

昭和58年度研究月報目次一覧

No. 1　年頭にあたって……平田冨太郎…
Message for the New Year…ルバック報道官…
スウェーデン――比較文化論……永山　泰彦…
研究所の活動メモ（57年）……
研究所法人会員名簿……
No. 2　スウェーデンの老人就労の試み……三浦　文夫…
松前会長北極星勲章一等コマンダー章受章……
スウェーデン消費協同組合の現状…内藤　英憲…
スウェーデンの国連待機軍制度と
災害援助活動の概要……松下　正三…
ガデリウス株式会社創立75周年を祝す……
ＫＦ会長一行来日……
No. 3　松前先生のご受章を祝う……西村　光夫…
地域社会福祉と国際性……佐藤　信平…
アルバ・ミュルダール女史の防衛政
策構想について(1)……小野寺　信…
No. 4　スウェーデン社会福祉でもっと知り
たいこと……仲村　優一…
1983/84 年予算案について(1)……松下　正三…
アルバ・ミュルダール女史の防衛政
策構想について(2)……小野寺　信…
スウェーデン映画へのお誘い……
No. 5　なぜオンブズマンという呼び名が用
いられるか……潮見憲三郎…
スウェーデン映画の風景と言葉……岩本　憲児…
1983/84 予算案について(2)……松下　正三…
スウェーデン大学技術教育調査団来日……
No. 6　スウェーデン経済の回復について…永山　泰彦…
＜Göteborg＞引越のこと、グニラさ
んのこと等……三瓶　恵子…
筑波科学博へボルボ社二両連結バス100両
政治問題研究会（潮見憲三郎）……
（新刊紹介）世界の幼児教育……
Current Sweden の目次……
No. 7―8　その後の社民党政権：潜水艦い
まだ浮上せず……岡沢　憲芙…
セメステルという言葉について……菱木昭八朗…
スウェーデンの夏……中村　明雄…
（新刊紹介）Ｔ・フセーン教授「自叙伝」……
（研究会報告）アルバ・ミュールダ
ールの軍縮論……
No. 9　スウェーデンと私……飯野　靖四…
ニイポンとリョンベール……石井新太郎…
スウェーデンサラリーマン基金財団
基本構想について……菱木昭八朗…
（ニュース）ねむの木の美術展、11月
にスウェーデンで……
高令化社会調査視察団帰国……
（研究会報告）スウェーデンの社会・
文化・教育における最近の動向……
（お知らせ）「福祉社会」を再考す
るゼミナール……
No.10　（高齢化社会調査視察団報告）
国際比較調査の必要性……三浦　文夫…
何を学ぶべきか……大橋　謙策…
二度目のストックホルムで……上野　章子…
学びたい福祉の意……竹内　かつ…
視察雑感……中山　秀豊…
フセーン教授ご夫妻歓迎会……
越智駐瑞新大使歓送会……
岡沢評議員ストックホルム大学客員に……
No.11　秋議会の開会と空前の大規模デモ…岡沢　憲芙…
スウェーデンの外交政策……松下　正三…
（高令化社会調査視察団報告）つづき
百聞は一見に如かず……辻　義人…
高令化社会視察団に加わって……宇津宮幸枝…
精神的ケアと政府部門を補足する
活動……城戸　喜子…
高令化社会の調査団に参加して…林　宰次…
カルチヤーショックのひとこま…潮　勇三…
わかりやすかったスウェーデンの
社会福祉……萩原　清子…
No.12　自由時間の活用と生涯教育……中嶋　博…
＜Göteborg 通信＞整理整頓をしな
かったために子どもをとりあげら
れたおかあさんの話……三瓶　恵子…
（高令化社会調査視察団報告）つづき
ヨーロッパ白秋……宮城　早苗…
オスロホテル偶感……下村　好代…
視察団添乗の記……小宮　健嗣…
スウェーデン伝統手工芸展開催さる……
プリンセス・リリアンスウェーデン
船を進水……
昭和58年度研究月報目次一覧……